

吾妻鏡データベースの構築

Construction of "Azumakagami-Database"

安道 百合子
Yuriko ANDO

国文学研究資料館
〒142-8585 東京都品川区豊町 1-16-10
National Institute of Japanese Literature
Yutakamachi 1-16-10, Shinagawa-ku, Tokyo 142-8585, Japan

あらまし：

鎌倉幕府が編纂した漢文体の古記録である「吾妻鏡」のデータベースの構築過程とその結果を報告する。これは国文学研究資料館で行われている「原本テキストデータベース事業」の成果の一部である。このデータベースは、本文の領域（漢文体）・付訓情報を記した領域（カタカナ）・訓読文を示した領域（漢字とカタカナが混在する読み下した文体）・暦日情報などの注釈に関わる情報を記した領域、という四つのデータ領域を持つ。漢文という枠にとらわれずに、どの領域からも自在に検索できるデータベース構築を目指した。

Summary:

"Azumakagami" is the history in a Kamakura era and be written in classical Chinese .

I will report the method for proceeding the database of "Azumakagami".

There are five fields of data in this database.

- (1)Original texts that was written in classical chinese character
- (2)Ruby (Phonetic characters written by Katakana)
- (3)Classical japanese that transrated classical Chinese ,it is written chinese character and Katakana
- (4)Notes such as calendar day information
- (5)Images of the original texts

This was made for the Japanese literature researcher. This is a part of the result of the project at the National Institute of Japanese literature.

キーワード：吾妻鏡, データベース, 古記録,

Keywords : azumakagami, database,

1. はじめに

国文学研究資料館の原本テキストデータベース事業は一つの古典文学作品を三年間かけてデータベースに仕上げ毎年刊行する計画のもとに行われている。一年目には業者による基礎入力作業、二年目には該当作品を専門とする複数の研究者による監修作業、三年目には資料館内でデータを統合、データベースとして仕上げるという総監修の作業をする。これは、毎年新たな作品を選んで作業にかかるという仕組みで、現在では一年間に三つの古典文学作品がいずれかの作業工程に置かれている状況である。したがって、資料館では、基本的に毎年新たな作品を総監修しており、昨年度は「吾妻鏡」であった。発表者はその総監集作業に関わった一人として、以下に吾妻鏡データベースの構築方法および結果を報告するものである。

古典文学研究は現在に伝わる諸本を読み解くことから研究がはじめられる。現在活字として流通している作品本文は、原本そのものの情報をそのままに伝えていたのではなく、読みやすさを考慮して表記を訂したり、他本と校合のうえより良いと思われる本文を採用といった校訂作業を経たものが多い。古典文学作品のデータとしては、底本そのものの固有の情報がまず求められるが、さらに、他の作品や同一作品で他の伝来系統を持つ本と比べようとするならば、表記をある程度統一させた情報が必要になってくる。つまり、古典文学作品のデータベースには、レベルを異にするいくつかの層の情報が求められるわけである。資料館のデータベース作成はそうした古典文学作品特有の問

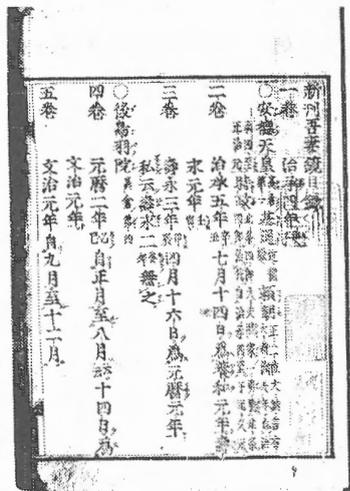
題点をできるだけ解決しようとしたものである。

なお資料館の原本テキストデータベース事業の成果は、古典作品のデータと、そのデータを検索利用するためのシステムを同梱して刊行している。システムは韻文作品用「和歌検索システム」と散文作品用「散文検索システム」の二種類で、「吾妻鏡」に関しては散文検索システムを用いて利用する。以下の本文においては、散文検索システムのことを「システム」、そのシステムに登録して利用する作品データのことを「マスタデータ」と称する。

2. 底本について

データベースの底本としたのは国文学研究資料館蔵寛永三年（1626）版の「吾妻鏡」25冊本である。「吾妻鏡」は鎌倉幕府が編んだ歴史書で、治承四年（1180）の頼朝挙兵に始まり、文永三年（1266）の六代将軍宗尊親王の辞任・帰京に終わる。中世以降、江戸時代まで広く武士の愛好書となっていたようで、寛永版本に大量の付訓情報があるのもその一端と言えよう。付訓情報は中世以降の読みをさぐる意味でも興味深い。

巻名はないが、年次を追って記述されているので、年月日が意味上の指標となる。物理的な位置情報は版本のV（冊）P（頁）L（行）で示す。完成したマスタデータは、テキストデータで約10メガの大きさである。



〈版本「吾妻鏡」第一冊 一丁表の画像〉

3. システムについて

まず、システムの構造について簡単に説明をしておきたい。散文作品は基本的に底本のVPLという位置情報で管理し、五層のデータ領域を自由に検索できるように設計している。五層とは①本文領域、②注記領域、③標準化領域、④メモ領域、⑤画像、である。資料館で仕上げるマスタデータはこの五層の領域を持ち、①②③④のどの領域からも一致文言・不一致文言を指定して検索することが可能で、検索結果を見る際にもその結果の位置に該当するすべての領域の情報を確認することができる。システムのブラウザ画面からは、作品全体を概観でき、利用者が必要な箇所の必要な領域のデータを見る（読む）ことも無論、自在である。②③④の各領域については、ブラウザ画面に編集ボタンがあり、利用者が検索をかけながら見つけた情報に対して、自分のルールでマーキングしていったり、メモ領域に情報をためたりして、記述されたデータのレベルを超えて活用することができる。①本文領域についても、マスタ出力で、マスタ全体をテキストデータとしてファイル化し、編集可能である。

マスタデータのフォーマットは公開しているので、どの領域に関しても利用者が自由に使用・作成することが可能になっているわけである。もちろん利用者が自分だけのマスタデータを作成してシステムに登録することもできる。コンピューター操作を不得手とする国文学者が、比較的簡単に、データベースの作成・利用・改変に関わることができることを目指して設計されたものである。

4. マスタデータの作成方法

(1) マスタデータの構造

マスタデータの構造は次のようになっている。

¥A 作品名（データ冒頭に一つのみ）

¥T 和暦

¥M 月日情報

¥B 本文領域

V

P

L

¥C 標準化領域

V
P
L
¥D 注記領域
V
P
L
¥E メモ領域
V
P
L

¥M 次の月日情報

(以下次の¥Tが立つまで同様に繰り返す)

これは吾妻鏡に限らず、散文検索システムに登録できるマスタの基本構造である。作品に応じて¥T・¥Mの内容は自由に設定でき、¥Tは必須タグだが¥Mは任意である。

(2) データ入力

初期入力には版本にある文字情報すべてと連辞符・返り点などの符合をすべて入力した。*図1参照。

(3) 漢文訓読文の作成

初期入力のデータは版本に忠実なデータであるが、版本に付されている情報すべてが、漢文を訓読するために必要にして十分な情報とは言えない。実際には、返り点の片方が落ちている場合があるため、返り点情報を抽出し、データの不備を補ったうえで、プログラム処理によって、訓読文を作成した。具体的には、返り点にそって漢字を並び替え、その漢字の送り仮名にあたる部分を補うという作業をしたわけである。*図2参照。あわせて、他の二層の領域作成を行った。漢字だけを集めて本文領域を作成し、連辞符を熟語認定の手がかりとしつつ振り仮名にあたる部分を集めて注記領域を作成。版本のどの位置の情報に関してもすべて五層の構造を持つため、作業としては画像を除いた四層を並べた「四行ファイル」という形式を作成した。一行に与えられる四層の情報を並べて作業を進めることができるため、データの訂正をしやすい形である。

(4) 四層のデータ領域の特徴

ここで各領域の特徴を簡単に示しておく。

①**本文領域** 底本を忠実に再現する領域。漢文の部分は、返り点・連辞符を抜いた白文の形で翻字する。漢字・仮名交じり文の部分(消息文など版本のごく一部に見える)は、そのまま翻字する。誤刻もそのままとする。漢字は原則として底本のままの字体。

②**注記領域** 吾妻鏡本文にある傍記を書き込む領域。漢字の振り仮名にあたる部分のかな(付訓)を原本のままおこす。音読符や漢字に濁点が振られている場合は歴史的仮名遣いで該当漢字の読みを記す。

③**標準化領域** 本文領域を訓読する領域。国史大系本「吾妻鏡」と大きく異なる本文は、その異同が同時に検索できる。

④**メモ領域** 校異や注釈等を書き込む領域。

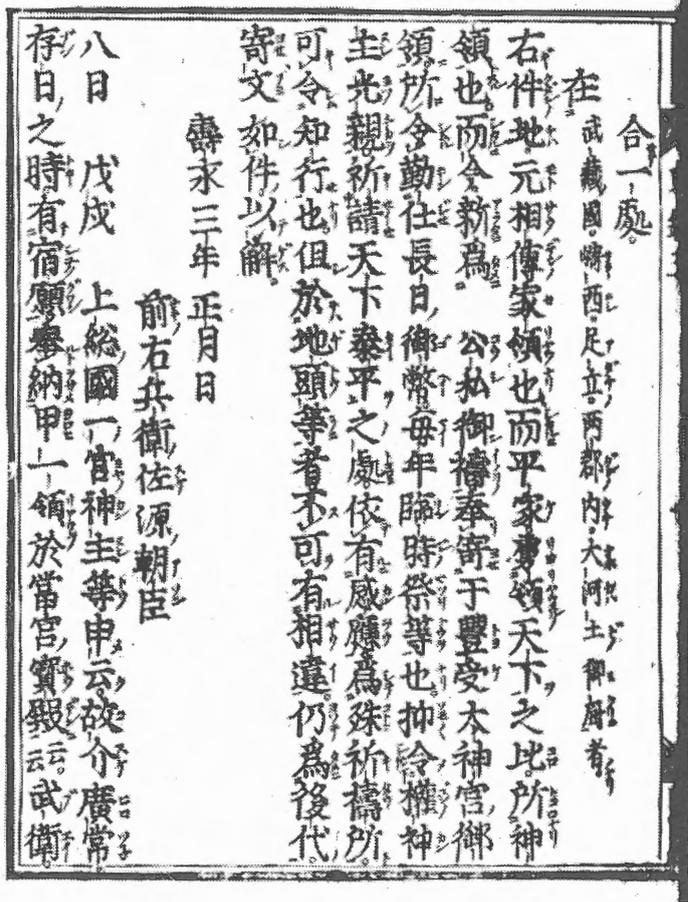
この段階では、④メモ領域には何も書き込まれていない。②注記領域と③標準化領域についても、形のうえでは出来ているが、その内容はまだ不十分なものである。なお「標準化」という名称は、古典文学作品全般を検索するために至便なように表記のゆれを最小限におさえるべく手を加えた領域を意味してここでは用いているが、なおその実際を言い得ているとは言い難く、用語そのものには問題を残していることを申し添えておく。

(5) 監修員による読みおよびデータ訂正

吾妻鏡やその周辺を専門とする史学及び国文学の分野の先生方十一人を監修員として資料館が選び、それぞれの先生に四行ファイルの状態データの確認訂正をしていただいた。まずは本文・注記の二領域が底本を忠実に再現したものになっているかの確認を行う。特に漢字については、単純な入力ミスがあれば改め、入力不能な漢字を入力可能な漢字に置き換えることが可能かどうかといった判断を行う。プログラム処理によって作成した訓読文は版本の連辞符などが正確でない場合もあり、必ずしもこなれた訓読文とはなっていない。また版本の誤刻やあやまった付訓と思われる場合もある。そうした部分についてコメントを付すことや適切な読みを提示していただくこととした。また現在流通している書籍のなかではもっとも一般的に用いられている国史大系本との校異をとり、メモ領域にその異同を書き込み、標準化領域にそれを反映させるという作業も行う。

この監修員が目と手を使って確認する工程は、デー

* 図1 初期入力の状態



* 左図：版本画像

* 下図：初期入力の状態

※初期入力は底本のとおりに翻字
漢字に附属する情報は
(振り仮名)
[送り仮名/返り点]
の書式でおこす。
漢字と漢字の間の連辞符は
真中にある場合：－
左端にある場合：＝
の記号を入れる。

※T 新刊吾妻鏡卷第三

V 0 3

P 0 0 1

< 中略 >

P 0 0 2

L 0 1 △△合 [セテ/] 一處、

L 0 2 △在 [ノ/] < 武蔵 [ノ/] 國、崎=西 (サキニシ)、足=立 (アダチ) [ノ/]、兩=郡 (ガン) [ノ/] 内 (ウチ)、大=河=土 (オホカハド) [ノ/] 御=厨 (ミクリ) [ニ/] 者 (ノ) [ナリ/]。 >

L 0 3 右 (ギ) 件 (クダン) [ノ/] 地 (チ) [ハ/]、元 (モト) 相=傳 (ソウデン) [ノ/] 家=領 (カリヤウ) 也 (ナリ)。而 (シカルニ) 平=家 (ケ)、虜= (リヨ) [ノ/] 領 (リヤウ) [スルノ/] 天=下 [ヲノ/] 之比 (コロ)、所 (トコロ) [ナリノ/] 神=

L 0 4 領 [トスルノ/] 也。而= (シカルニ) 今、新 (アラタ) [ニ/] 爲 (タメ) [ニ/] △公=私 (コウシ) 御= (ン) 禱 (イノリ) [ノ/]、奉 [リノ/] 寄 (ヨセ) [ノ/] 于豐=受 (トヨケ) 太=神=宮 [ノ/] 御=

L 0 5 領 [ニノ/]。所 (ロ) [ノ/] 令 (シム) [ルノ/] 勤= (キン) [ノ/] 仕 (ジセ) 長=日 [ノ/] 御=幣 (ゴヘイ)。每= (マイ) 年臨=時 (リンジ) [ノ/] 祭=等 (マツリトウ) [ヲノ/] 也 (ナリ)。抑 (ソモト) 令 (シム) [シテ・ルノ/] 權= (ゴン) [ノ/] 神=

L 0 6 主 (カンヌシ) 光=親 (ミツチカ) [ヲノ/]、祈= (キ) [ノ/] 請 (セイ) [セノ/] 天=下泰= (タイ) 平 [ヲノ/] 之= (ノ) 處 (トコロ) [ニノ/]、依 [テノ/] 有 [ルニノ/] 感=應 (カンヤウ) [ノ/]、爲 (シテ) [ノ/] 殊 (コト) [ニノ/] 祈=禱= (キタウ) 所 [トノ/]、

図2 漢文訓読文作成の過程

〈初期入力の状態〉

L05 領 |ニノ一|。所 (ロ) |ノレ| 令 (シム) |ルノレ| 勤 (キン) |ノ二| 仕 (ジセ) 長一日 |ノノ| 御
 幣 (ゴヘイ)。毎 (マイ) 年臨一時 (リンジ) |ノノ| 祭=等 (マツリトウ) |ヲノ一| 也 (ナリ)。抑 (ソ
 モ++) 令 (シム) |シテ・ルノ下二| 權 = (ゴン) |ノノ| 神 =
 L06 主 (カンヌシ) 光=親 (ミツチカ) |ヲノ一|、祈 (キ) |ノ中| 請 (セイ) |セノ| 天=下泰 (タイ)
 平 |ヲノ上| 之 (ノ) 處 (トコロ) |ニノ|、依 |テノレ| 有 |ルニノ二| 感=應 (カンヤウ) |ノ一|、爲 (シ
 テ) |ノ二| 殊 (コト) |ニノ| 祈=禱 (キタウ) 所 |トノ一|、

〈返り点の不備を●で示した状態〉

L05 領 |ニノ一|。所 (ロ) |ノレ| 令 (シム) |ルノレ| 勤 (キン) |ノ二| 仕 (ジセ) 長一日 |ノノ| 御
 幣 (ゴヘイ)。毎 (マイ) 年臨一時 (リンジ) |ノノ| 祭=等 (マツリトウ) |ヲノ一| 也 (ナリ)。抑 (ソ
 モ++) 令 (シテ・シ) |ルノ下●| 權 = (ゴン) |ノノ| 神 =
 L06 主 (カンヌシ) 光=親 (ミツチカ) |ヲノ●|、祈 (キ) |ノ中| 請 (セイ) |セノ| 天=下泰 (タイ)
 平 |ヲノ上| 之 (ノ) 處 (トコロ) |ニノ|、依 |テノレ| 有 |ルニノ二| 感=應 (カンヤウ) |ノ一|、爲 (シ
 テ) |ノ二| 殊 (コト) |ニノ| 祈=禱 (キタウ) 所 |トノ一|、

〈返り点の不備を正した状態〉

L05 領 |ニノ一|。所 (ロ) |ノレ| 令 (シム) |ルノレ| 勤 (キン) |ノ二| 仕 (ジセ) 長一日 |ノノ| 御
 幣 (ゴヘイ)。毎 (マイ) 年臨一時 (リンジ) |ノノ| 祭=等 (マツリトウ) |ヲノ一| 也 (ナリ)。抑 (ソ
 モ++) 令 (シテ・シ) |ルノ下| 權 = (ゴン) |ノノ| 神 =
 L06 主 (カンヌシ) 光=親 (ミツチカ) |ヲノ|、祈 (キ) |ノ中| 請 (セイ) |セノ| 天=下泰 (タイ)
 平 |ヲノ上| 之 (ノ) 處 (トコロ) |ニノ|、依 |テノレ| 有 |ルニノ二| 感=應 (カンヤウ) |ノ一|、爲 (シ
 テ) |ノ二| 殊 (コト) |ニノ| 祈=禱 (キタウ) 所 |トノ一|、

〈プログラム処理を行い訓読文にした状態〉

L05 領ニ寄奉リ。長日ノ御幣。毎年臨時ノ祭等ヲ勤令ル所仕也。抑權ノ神
 L06 主光親ヲ、天下泰平ヲ祈請セ令・ル之處ニ、感應有ルニ依テ、殊ニ祈禱所ト爲、

〈監修員によって適切な訓読文に訂した状態〉

標準L05 領ニ寄セ奉リ、長日ノ御幣、毎年臨時ノ祭等ヲ勤仕セ令ル所也。抑權神
 標準L06 主光親ヲシテ、天下泰平ヲ祈請セシムルノ處ニ、感應有ルニ依テ、殊ニ祈禱所ト爲テ、

タの信頼性を高めるために必須の工程である。

(6) 総監修作業

監修員の確認を終えたファイルを統合・訂正・総仕上げの作業である。

監修員の確認をおえたファイルはさまざまな見解が入って、データの内容そのものはより高度なものになっているが、同時に、見解の相違や不統一な箇所が多く混じるといふ難点も生じる。総監修の工程では、そのデータを内容的に統一のとれたものに仕上げ、さまざまな検索に耐えるように訂正していく。

標準化領域の統一化作業の実際は、項目の選択(何を統一させる必要があるか)・検索利用をしながらの検討(どのように統一させるのか適切か)・版本付訓のばらつきを検証などを繰り返して進める。また、異体字テーブルを作成し、この領域については、通行漢字に改めるという処理を行っている。これらの処理の一例は凡例に示している。

この段階で新たに追加したこととしては、次の二点である。

第一に、歴史書であるという作品の性質を最大限に生かすタグの構造が求められると判断し、暦日情報をタグ付けすることとした。初期入力段階では¥Tに巻数を入れてあるのみで、任意タグの¥Mは空状態であったが、ここで、¥Tに和暦情報を、¥Mに月日情報を入れた。それにより、システムのブラウザ画面の左に年月日が一覧できるようになったわけである。同時に暦日情報からの検索に耐えるべく、メモ領域の各日最初の行に暦日情報を一定の書式で書き入れた。システムは検索のみをするために開くのではなく、ブラウザ画面であたかも書籍をひもとくように、本文を縦覧できる設計となっているため、その最初の画面に暦日情報が見出しとして見えるかたちにするこゝで、縦覧のしやすさは格段にあがるものと考えられる。

第二に、底本にない情報の追加である。底本には、脱落部分が存するため、他本で補う必要がある。これも、歴史書であるという作品の性質上、底本にはなくても、現在伝わる「吾妻鏡」諸本の情報を集めた全体を検索する利用者の必要性に応じるためである。底本にない情報については、伝本のなかではもっとも情報量の多い「吉川本」を用いて、補うこととした。本文領域には「吉川本」の本文を引用し、標準化領域には独自に訓読文を作成した。注記領域は空となるが、メモ領域の情報は底本にある情報の部分とまったく同じ

体裁である。

5. 完成したマスタと検索の実例

完成したマスタデータの内容は次のようになっている。その一部をここにひく。

- ¥A 吾妻鏡
- ¥T 新刊吾妻鏡目録
- ¥M 小見出名なし
- ¥B 本文領域
- V 0 1
- P 0 0 1
- L 0 1 新刊吾妻鏡目録
- L 0 2 一卷△△治承四年〈庚子〉
- L 0 3 安徳天皇、〈高倉第一〉基通〈近衛殿〉頼朝〈正
〈中略〉
- ¥C 標準領域
- V 0 1
- P 0 0 1
- L 0 1 新刊吾妻鏡ノ目録
- L 0 2 一卷△△治承四年〈庚子〉
- L 0 3 安徳天皇、〈高倉ノ第一。〉基通〈近衛殿。〉頼朝
〈中略〉
- ¥D 注記領域
- V 0 1
- P 0 0 1
- L 0 1
- L 0 2 (6) セウ／(10) カノエ
- L 0 3 (1) アントク／(7) タカクラ／(12) モ
〈中略〉
- ¥E メモ領域
- V 0 1
- P 0 0 1
- L 0 1
- L 0 2
《中略》
- ¥T 序
- ¥M 小見出名なし
- ¥B 本文領域
- V 0 1
- P 0 1 4

—以下略—

付録1. 異体字テーブル

標準化領域については異体字処理をおこなった。以下の表の左側の字を右側の字に変換することによって、通行の字体に改め、検索の便を高めるためである。

亞 亜	惡 惡	蘆 芦	鯨 鯨
壓 圧	菴 庵	圍 囲	爲 為
醫 医	毓 育	弋 一	壹 壹
稻 稻	飲 飲	媵 淫	隣 隣
詢 詢	卵 卵	鬱 鬱	厩 厩
殿 殿	閨 閨	審 審	營 營
曳 曳	榮 榮	願 願	衛 衛

凡例の一部： 異体字テーブル（602字のうちの一部）

◆ 送り仮名の補い方について。

a) 送り仮名の補い方は次のようにする。

(連体詞・副詞等は多くカナ一字のみを送るのを基準とするが、
 原本の付訓の傾向も考慮して決めた)

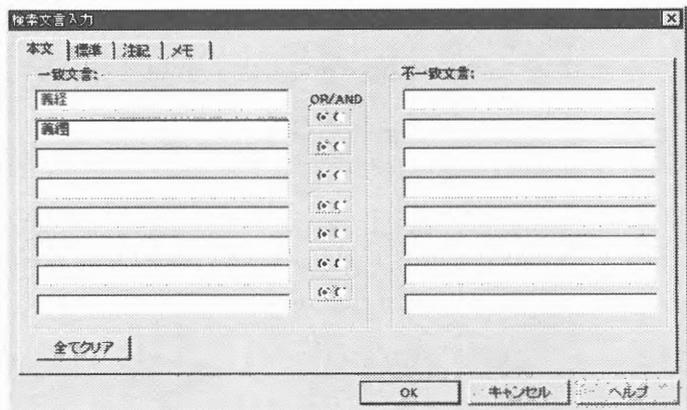
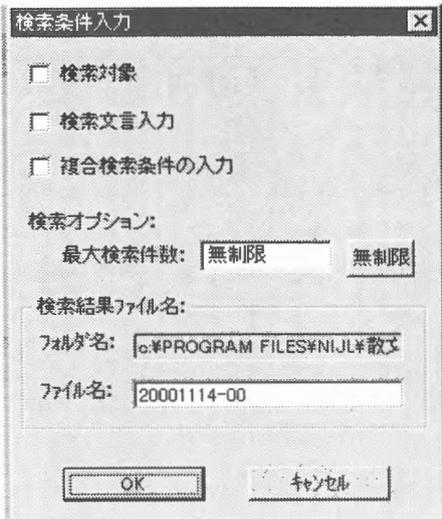
兼テ(かねて)	尤モ(もつとも)	甚ダ(はなはだ)
太ダ(はなはだ)	悉ク(ことごとく)	忽チ(たちまち)
聊カ(いささか)	凡ソ(およそ)	但シ(ただし)
敢テ(あへて)	刺ヘ(あまつさへ)	争カ(しかでか)
難モ(いへども)	頗ル(すこぶる)	殆ド(ほとんど)
先ヅ(まつ)	若シ(もし)	就テ(ついで)
依テ(よつて)	因テ(よつて)	以テ(もつて)
周章テ(あはてて)	合せテ(あはせて)	并ニ(ならびに)
頻ニ(しまりに)	次ニ(ついでに)	
相ヒ互ニ(あひたがひに)	相ヒ~	
然シテ(然而・しかして)	然レドモ(然而・しかれども)	
而シテ	而ルニ	
云ク(いはく)	曰ク(いはく)	同ク(おなじく)
其ノ(その)	此ノ(この)	是レ(これ)
向フ(むかふ)	違ハス(つかはず)	訪フ(とぶらふ)
行フ(おこなふ)	賜フ(たまふ)	賜ハル(たまはる)
御フ(たまふ)	奉ル(たてまつる)	奉ハル(うけたまはる)
訪ヌル(たづぬる)	生痛ル(いけどる)	勿カレ(なかれ)
甚シ(はなはだし)	知シ召ス(しるしめす)	聞シ食ス(きこしめす)

b) 次の語(接続詞の一部・名詞)にはカナを送らない。

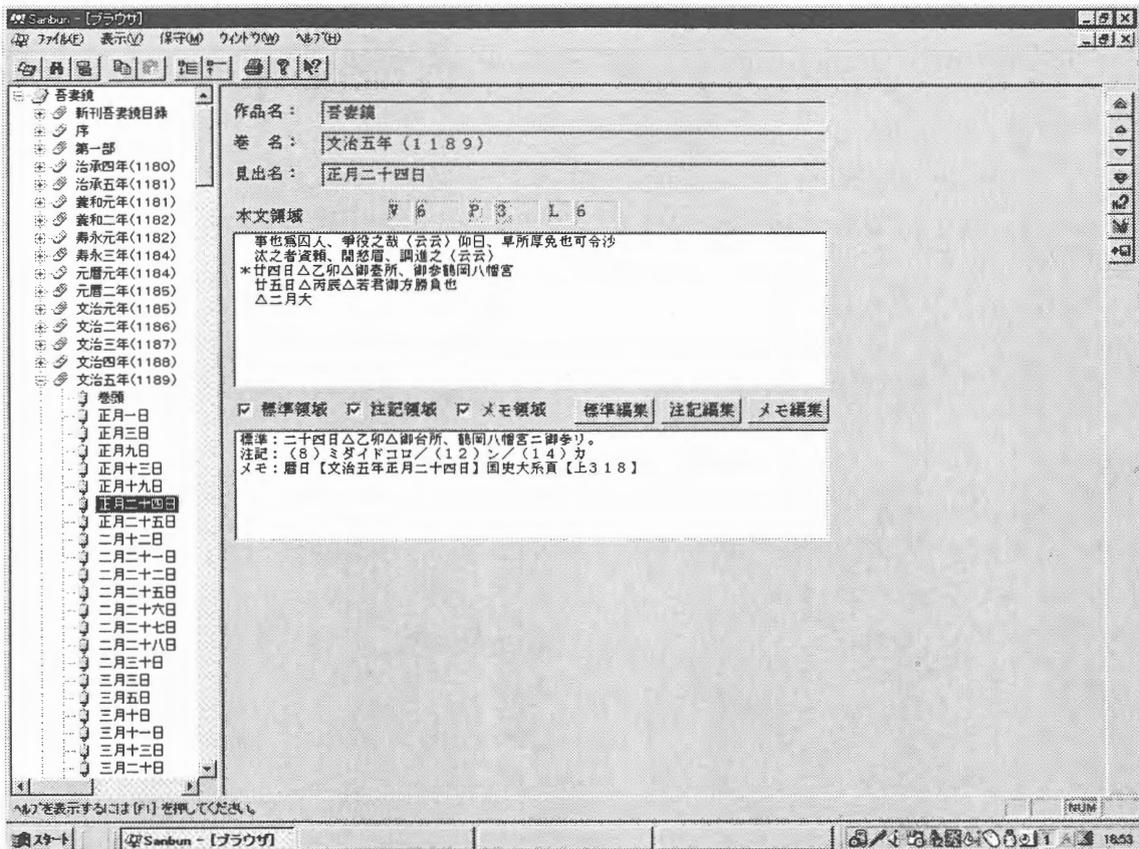
又・亦・之(これ)	矣(かたがた)	使(つかひ)	次(つぎ)
據(よんどころ)	且(かつ)	故(ことさら)	猶(なほ)
兼(ともがら)	尚(なほ)	由(よし)	旨(むね)

c) 一つの漢字が名詞としての読みと動詞としての読みを持つ場合は、
 名詞には送り仮名を補わず、動詞にはカナを補う

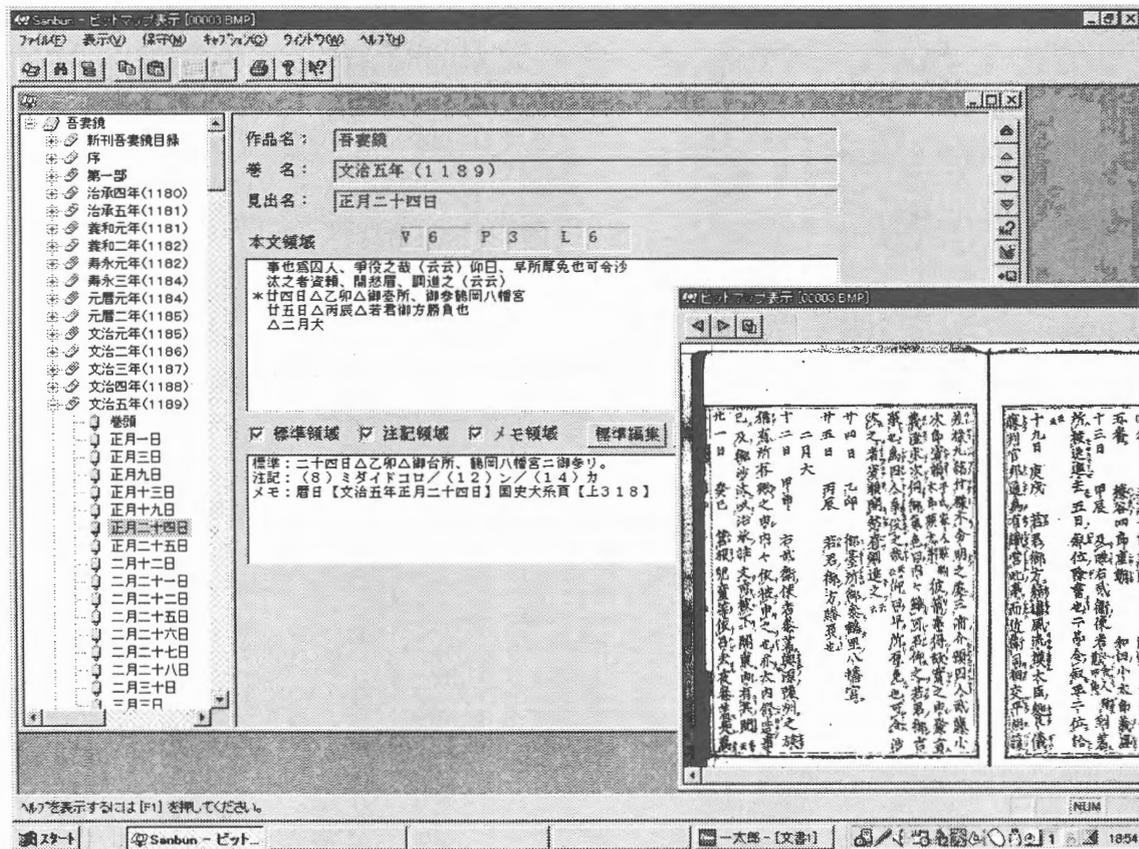
凡例の一部
 : 標準化
 領域におけ
 る送り仮名
 の補い方



左：検索条件入力画面 ・ 上：検索文言入力画面



〈図：ブラウザを開いた画面〉



〈図：本文に対応する画像を開いた画面〉

実際に検索を行う手順

検索の一例である。

- 1) 結果画面を開く
 - 2) 検索作品を選ぶ
 - 3) 検索領域を選ぶ
 - 4) 検索文言（一致文言・不一致文言）を入力
 - 5) 複合検索の方法を設定（本文 and 標準 など）
- * 検索
- 6) 検索結果画面
 - 7) ヒット文言一覧から用例を選ぶ
 - 8) 本文表示（ブラウザ）

6. 本データベースの可能性と課題

このデータベースの独自の点は標準領域に読みやすい訓読文を示したことにある。単純に読みやすさからの利用者増は期待できる。また全文の訓読文がデータベースとして提示されたことは前例がないため、その完成度はともかく、初の試みとしてたたき台にはなると思う。システムを使いこなして利用しようとする研究者にとっては、平家物語などの同時代の作品をマスターデータの形にして登録しておけば、本文の形態の異なる文献を同時に検索できるという点も魅力であろう。

課題としては、「標準化」の不徹底である。資料館内では、事業の発足当初から、原本に特化することなく、ひろく古典文学作品を検索するために必要な仮名遣い等の統一化の作業を経た情報の領域を「標準化領域」と呼んできた。既に刊行された「絵入源氏物語」のこの領域では、本文をすべて統一された歴史的仮名遣いによって平仮名にひらくこととしている。その際、濁音を清音に、音便形を音便のない形へそろえる処理も行っている。

「吾妻鏡」の場合は、本文が基本的に漢文体であるために、すべてを仮名にひらくことが必ずしも検索の便を高めることにはならないと判断した。とはいえ、現代の利用者の読みやすさ・成立時代の訓読法・版本の訓読法（付訓）のいずれを優先させるべきかという点が最後まで問題となり、いずれと確定もされなかった。基本的に版本の付訓は注記領域に持たせていることと、全頁の画像があることとで、補えると考えている。強いていえば、検索もれを最小にすることに注意をはらったため、版本の付訓をできるだけ生かすつも、現在の研究者の読みになじむまいと判断されたも

のは訂正し、ある程度、用字・送り仮名・仮名遣いなどを統一させることにした。結果にいたるいちいちの統一化の検討については、当然反対意見もあろうが、その方針を凡例に掲げることで利用者には説明することとした。

最終的に現在出版されている「絵入源氏物語」の標準化とはずれを抱えているわけである。漢文体の作品の場合、五層の構造が不十分なのか、あるいはもっと別の形態があるのか、という点については、今後利用者の意見を聞きながら模索していきたい。

7. おわりに

本データベースは利用者参加型のデータベースである。書籍として出版されている古典本文には、校訂者の解釈が提示されるのが普通であるが、このデータベースはできるだけ、底本の情報を忠実に再現することにつとめている。画像はその最たるものであるが、全画像を公開することにより、利用する研究者は、国文学研究のどの段階からでも研究対象に向かうことが可能となっているわけである。日本語、とりわけ古典文学の検索にはできるだけ、解釈の入らない、けれども検索もれを最小限におさえるべく配慮されたデータが必要である。それをここでは標準化領域と呼んだわけだが、底本の情報を尊重しながら、一方で検索に備えるための措置である。利用者は利用しながら、自分の解釈を入れていったり、自分なりの注釈をつけていったり、自分だけのデータを作り上げることができる。版本（写本や古筆切の場合もある）を読むことから始めて、一冊の注釈書を作り上げるまでの、古典文学研究の流れを、どの段階からでもはじめられ、どのレベルまでも高めることができるというのが、国文学者にとってのこのデータベースの最大の魅力であると考えている。

謝辞

吾妻鏡データベースの構築は国文学研究資料館の事業の一環であり、本稿は研究情報部データベース室長中村康夫助教授の指導のもとに作成した。データベース監修員として関わってくださった方は、佐伯眞一・櫻井陽子・早川厚一・永村眞・大友一雄・田淵句美子・大津雄一・小川剛生・高山有紀・磯水絵・市川浩史・近藤成一諸氏である（敬称略）。記して御礼申し上げます。